

令和 5 年 6 月 2 日現在

機関番号：16101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K10348

研究課題名（和文）Hopeを強化した手術を受ける肺がん患者リハビリテーション看護ケアモデルの構築

研究課題名（英文）Construction of a lung cancer rehabilitation nursing care model undergoing Hope-enhanced surgery

研究代表者

板東 孝枝（BANDO, Takae）

徳島大学・大学院医歯薬学研究部（医学域）・准教授

研究者番号：00437633

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：不安や脅威を克服し、より主体的に自分らしく生きぬくために必要なHopeを強化するリハビリテーション看護ケアモデルの構築を目的に実施した。術後の不快症状が3～6ヵ月続く可能性があるため、この時期にある患者のHopeの体験について分析した結果、回復の実感と回復に向けた自助努力により、患者のHopeに繋がっており、患者の多くは、不快症状を抱え退院し、病院から離れた療養場所で心身の回復を待つ現状から、回復に向けた自助努力を支える看護支援が必要であることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

在院日数が短縮され、医療者が治療に伴う症状の改善への支援が困難となっている現状がある。本研究では、患者は自分の体調を整えるための方法を模索し、常に変化する体調や心理状態に対処し、回復の実感と回復に向けた自助努力により、患者のHopeに繋がっていることが明らかになった。多くの人ががんに罹患する時代となった現在において、本研究の知見をもとに、医療者が対象理解を深め、身体的・心理的な回復を促進し、早期社会復帰に向けて心的エネルギーであるHopeを維持・強化していくことで、患者はセルフケア能力を最大限に発揮し、がんサバイバーとしての生活の構築に前向きに取り組む姿勢を支える重要な支援となると考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to construct a rehabilitation nursing care model that strengthens Hope, which is necessary for lung cancer patients who are candidates for surgery, to overcome various anxieties and threats expected in the course of treatment and recuperation, and to live life as themselves more proactively. Since postoperative discomfort can persist for 3～6 months, an analysis of the patient's experience of Hope during this period revealed that the realization of recovery and self-help efforts to recover led to the patient's Hope. Many postoperative lung cancer patients are discharged from the hospital with unpleasant symptoms and wait for physical and mental recovery in a sanatorium away from the hospital. It became clear that nursing support is necessary to support self-help efforts toward early rehabilitation.

研究分野：がん看護

キーワード：肺がん患者 がん手術療法 Hope がんリハビリテーション看護

1. 研究開始当初の背景

肺がん手術療法は、手術技術の進歩により、低侵襲下となり、傷も小さく、手術後 1 週間程度で退院が可能となった。しかしながら、肺の解剖学上の特徴から、術中は患側上肢を挙上した側臥位をとることが一般的で、創部よりもむしろ手術中の体位による肩の痛みや手術操作に伴う不快症状が長期に渡り生じることがあり(板東, 2015)。患者は手術後の不快症状を抱えたまま退院を余儀なくされている。また、在院日数の短縮化から、術前の入院期間は 1 日程度で、看護師が術前から退院までに患者と関わる時間は短く、患者の手術に対する準備状態や術後回復を見届けることも難しい現状がある。

Hope は、がん患者にとって、ダイナミックな個人の生命力となるものであり、不安や恐怖に立ち向かい、自己の存在や価値を保護するための心的エネルギーになりうるものという特徴がある。生存率が向上しているとはいえ、進行がんで発見されることの多い肺がん患者にとって、Hope は自らの人生を自分らしく生きぬく力になるものと考えられる。そして、肺がんの罹患や手術により生じた制限の中で、自分の日常生活を取り戻すこと、すなわちがんリハビリテーションを推進していくエネルギーになるものが、まさに Hope であるといえる。つまり、がんサバイバーとしての長い道のりを支援していくためには、がんリハビリテーションの視点に立ち、周手術期から肺がん患者の生きぬく力である Hope を強化したその人らしい日常生活への復帰をめざした看護が是非とも必要である。そしてがん患者が自立して生きるために活力や自信を高め、機能的な回復に向けて取り組み、その人にとっての普通の生活を送れるよう支援することが、がんリハビリテーションに携わる看護師に求められる(矢ヶ崎, 2016)。

一方、治療の進歩により、肺がん手術は低侵襲化しているものの、研究代表者らの調査では、咳、呼吸困難、胸部の痛みの 3 症状が、術後 6 か月まで持続し、がん罹患したことの不安に加えて、治療に伴う症状が患者を悩ましており、これらの症状が Hope に影響していることが明らかとなった(板東 et al, 2015)(2009 年～2012 年、文部科学省科学研究費補助金(若手研究(B)21792219)。このことは、術後の症状緩和が Hope につながることを示唆しており、患者自らが症状を含めた術後の心身の回復状態をモニタリングし、回復感の体験を Hope につなげていけるよう支援することが、リハビリテーションの促進要因になると考える。

以上のことから、“Hope を強化した手術を受ける肺がん患者リハビリテーション看護ケアモデル”は、肺がん手術に特有な苦悩や症状を体験している患者に対して、心的エネルギーと心身の回復の連環から生み出される Hope を、自らの日常生活の構築につなげていくことを支援する看護ケア開発となる。また、肺がんは世界中で増加しており(worldwide data, 2016) わが国では死亡原因の第 1 位であるが、本プログラムは、生存率のみにとらわれず、がんサバイバーとして自分の日常を生き抜くことを支える看護ケアになると考える。

2. 研究の目的

本研究の全体構想は、手術を受ける肺がん患者が、治療・療養過程において心的エネルギーである Hope を強化するためのリハビリテーション看護ケアモデルを構築することである。

(本研究課題の具体的な目的)

(1) 因子探索型質的記述研究により、手術を受ける肺がん患者が主体的な治療・療養生活の獲得に向け、主体的に治療に参加する上で重要な概念である Hope を強化するために必要な要素を明らかにする。

(2) がん患者の Hope に影響を及ぼす要因やがんリハビリテーションについて、学会への参加や文献検討により研究動向の把握を行い、看護ケアモデルに必要な要素を明らかにする。

(3) (1)、(2) より、看護ケアモデルの構築を行う。

3. 研究の方法

2018 年度は文献検討や学会参加等による情報収集と研究の動向を把握する。

エビデンスの水準(Melnyk, 2005)を明確にし、医学中央雑誌、PubMed、J-stage、PsycINFO にて、abstract のある文献を中心に文献検討を行い、がん手術療法を受ける肺がん患者の Hope を強化した肺がんリハビリテーション看護ケアの内容の検討を行う。

2020～2022 年度は、がん手術療法を受ける肺がん患者の Hope を強化した肺がんリハビリテーション看護ケアモデルを開発する上で必要な影響要因について、文献検討や研究者間 meeting をもとに検討をする。研究者らは、Hope をケアの核として、がん手術療法に伴う症状や対処、そして支援の関係性を 55%説明できている(Bando, 2017)ことから、このモデルにがんリハビリテーションの要素を加え、モデルの枠組み(案)を作成する。がん手術療法を受ける肺がん患者の Hope を強化した肺がんリハビリテーション看護ケアモデルを評価するための要素を抽出するためにも研究を行い、日本における医療の現状や文化的背景を考慮し、(1)、(2)により、Hope を強化した手術を受ける肺がん患者リハビリテーション看護ケアモデル”の構築を行う。

4．研究成果

本研究の全体構想は、手術療法を受ける肺がん患者が主体的に治療に参加する上で重要な概念である Hope を強化するために必要な要素と患者の身体的・心理的回復の促進に有効ながんリハビリテーションプログラムの内容を明らかにし、手術を受ける肺がん患者の Hope を強化したがんリハビリテーション看護プログラムの構築を行うことである。四国県内にあるがん診療拠点病院において、23 名の肺がん患者の術後回復過程の Hope と体験について分析を行った結果、回復の実感と回復に向けた自助努力により、患者の Hope に繋がっていることから、回復に向けた自助努力を支える看護支援が必要であることが明らかとなった。またがんゆえに手術後も再発や転移となる患者も多いことから、根治手術後に再発・転移をした 41 名の肺がん患者の心理的適応に関連する要因について分析を行った結果、女性、職業、65 歳以上、配偶者の有無、進行がんであることが明らかになった。

本研究期間である 2020 年以降、新型コロナウイルスの影響により、研究協力施設への立ち入り制限や患者との接触時間の制限等から、研究フィールドの調整が難航し、データ収集の中止を余儀なくされた経緯があるが、可能な限り研究を遂行していくなかで、手術を受ける肺がん患者が、治療・療養過程において心的エネルギーである Hope を強化していくためには、患者の回復の実感と回復に向けた自助努力を支える看護支援が必要であることが明らかとなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|---|--|----|
| 研究分担者 | 雄西 智恵美 (ONISHI Chiemi) (00134354) | 甲南女子大学・看護リハビリテーション学部・教授 (34507) | |
| 研究分担者 | 近藤 和也 (KONDO Kazuya) (10263815) | 徳島大学・大学院医歯薬学研究部(医学域)・教授 (16101) | |
| 研究分担者 | 今井 芳枝 (IMAI Yoshie) (10423419) | 徳島大学・大学院医歯薬学研究部(医学域)・教授 (16101) | |
| 研究分担者 | 高橋 亜希 (TAKAHASHI Aki) (70799874) | 徳島大学・大学院医歯薬学研究部(医学域)・助教 (16101) | |

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|-----------------------------------|-----------------------|----|
| 研究協力者 | 滝沢 宏光 (TAKIZAWA Hiromitsu) | | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|